
けいおん！ifスト！！律ルート！！！！

せいごー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ifスト！！律ルート！！！！

【Nコード】

N1371W

【作者名】

せいごー

【あらすじ】

唯「あらすじだって」

澪「何をすればいいんだ？」

紬「とりあえず主人公の紹介じゃない？」

律「この小説の主人公である私、田井中律は…」

滯「お前は主人公じゃないだろ」

律「ええー。いいじゃん」

唯「なんかもうよくない。それよりお茶にしようよ」

律「そうだな。読んでもらえばわかるし。ムギ〱お茶いれて」

紬「はいは〱い。」

滯「いいのか本当に…。」

碧「…結局、俺しゃべってないじゃん。」

「」「あっ! いたの?」「」「」

碧「ひでえ」

プロローグ 始まり

「ちきしょう」

目覚ましがなる3分まえに起きちまった。

このまま寝ても3分後にはおきちまう。

止めて寝たら遅刻。

しかも今日は入学式。

だが起きるのは悔しい。

ジリリリリリリ

そんなことを考えてる間に結局3分たって目覚ましがなる。

悔しいが遅刻する訳にはいかない。

登校するか。

俺が今年からいやというほど通う高校は桜ヶ丘高校って今年から共学になった男子的にはハーレムな感じが予想される学校だ。

わかってると思うが俺はそんなこと考えてないからな。

ただ家が近かったただだからな。

そこらへん勘違いするなよ。

校門が見えたところでチャイムが聞こえた。

どうやら俺は目覚ましの時間を間違っただけらしい。

初日から遅刻とは先が思いやられるぜ。

そんなことを思いながら俺は教室に向かった。

さてそんなかんじではじまった高校生活だが、まあこの辺で自己紹介を。

俺の名前は鷹成^{たかなり} 碧^{あお}。

桜ヶ丘高校に通う15才だ。

プロローグ 始まり（後書き）

せい「終わったあ」

碧「まだ始まったばかりだぞ」

せい「感想いただけると嬉しいです。ありがとうございました。」

第1話 入学式!

碧「マジかよ」

クラス表をみて薄々感じていたのだが。

碧「クラスに3人しか男子がいないって…」

空「ハーレムだよな!」

碧「うっせえ、バカ」

この変態は中学からの悪友、笹中 ささなか 空也 くうや だ。

零「でも、3人とも一緒によかったよねえ」

こいつは中学からの悪友その2、春咲 はるさき 零次 れいじ である。

碧「まあ、確かにそれに関しては同意するよ」

空「このクラスじゃあそうだな。秋山さんなんかいいんじゃないかねえの?」

聞いてねえよ

谷口かお前は

律「ほほお、滞に目をつけるとはねえ」

いきなり目の前の席のやつが話しかけてくる。

律「おっと、自己紹介がまだだっけ、田井中^{たいなかりつ}律だ。よろしくな」

碧「ああ、よろしく」

零「よろしく」

空「田井中さんは秋山さんと知り合いなのか？」

おい、挨拶くらい返せ

律「うん。小学校からだな。でも滯を攻略するのは大変だぞ。あいつは極度の恥ずかしがりやで、男子とは特に話せないからな。」

碧「だってよ、諦めろ」

零「男子が苦手なのに、空也に話しかけられたら死にたくなるよね」

空「何でだよっ！」

「「だって、キモいじゃん」」

空「田井中さんまで!？」

先生「笹中君、うるさいですよ」

空「俺だけ!？」

俺達3人が笑い、先生が咳払いをした。

先生「では、講堂に移動します。」

講堂に移動した俺達は名前順に席についた。

席は俺の前に空也、隣に田井中さん、その後ろに零次という誰かが仕組んだんじゃないかと考えてしまう席だ。

空「入学式って、眠くなるよな」

零「校長先生の話とか長いんだよなあ」

律「そうそう、あれさえなければなあ」

碧「Z Z Z」

「「もう寝たのかよ!!」「」」

入学式が始まり、校長先生の長い長い話が始まった。

律（ヤバい、私も眠くなって…）

コトン

何が肩に当たった。

目を開けてそっちに目をやると田井中さんが俺に寄りかかって寝ていた。

碧（ヤバい、こんな事初めてだよ）

鼓動が早くなるのが自分でもわかる。

碧（よく見ると、結構かわいいよな、田井中さん。

こんな子と付き合いたいなあ。
…って俺は空也かよ。）

そんな事を考えている間に俺は寝てしまった。

空「ハイ、チーズ」
カシャッ

空也のウザい声と写メの電子音で俺は起きた。

「ラブラブだねえ」

碧「え、ええ！」

律「わあ！」

田井中さんは俺の肩に頭を、その上に俺は頭をのせて寝ていた。

漑「律に彼氏ができた」

律「話が飛びすぎだ、漑！っっーかいっから」

碧「そうですよ、俺なんか田井中さんと付き合えるわけないじゃないですか」

空「でた、敬語。何でお前女子と話すときは敬語なんだよ」

零「あれ、でも田井中さんとはタメ口だったよね」

あれ？何でだろ？

田井中さんとは普通にしゃべれたなあ。

律「…ほほお、私を女としてみてないとゆうことかなあ」

碧「え、いやそういうわけじゃあ」

律「じゃあどういうわけだよ」

碧「いや田井中さんは、親しみやすかったっていうか、なんか初めてあった気がしないっていうか／＼／＼／＼」

律「や、やめろよ恥ずかしい／＼／＼」

「「「…ラブラブだな」」」

「「うるせえ！」」

この日は俺と田井中さんはクラスのやつから散々からかわれて終わるのだった

第1話 入学式！（後書き）

せい「さて、第1話、お楽しみいただけたでしょうか」

碧「俺と空也と零次の名前のもとねたって、あれか」

せい「ああ、日本ファルコムさんのゲームからだよ」

碧「知ってる人、いるかなあ」

せい「さあ」

碧「おい」

せい「では第二話をお楽しみみに」

第二話 部活！

零「部活決めた？」

入学式から何日かたったある日の昼休み

俺は空也と零次と飯をくっていた

空「いや、ぜんぜん」

碧「右に同じく」

零「そろそろ決めたほうがいいよね」

碧「でも運動部とかめんどくさいしなあ」

空「ああ、そもそも男子の部がねえだろ」

碧「帰宅部でよくね」

零「うーん、でも高校入ったし部活はやっときたいよね」

空「秋山さんは何部入ったのかな？」

碧「知らねーよ、っーかそればっかだなお前は」

空「だってよー、せっかく女子がたくさんいるんだから可愛い娘とお近づきになりたいだろー」

零「でも望み薄だよね」

空「うるせえ」

そんな話をしていると律が近づいてきた

律「漣は軽音部だぞ」

空「秋山さん、楽器できるのか!?!」

律「ああ、ベースやってる。なかなかうまいんだぞ」

零「田井中さんは何かやってるの」

律「よくぞ聞いてくれた! 私はドラマーなのだ!」

碧「まあそれしかないよな」

律「どういう意味だよ」

碧「なんか、チマチマしたこと嫌いなタイプだろ」

律「うっ、……なんでわかるんだよ」

零「まあまあ田井中さん、そうだ他のパートの人は?」

ナイスだ。零次

律「キーボードに同学年の琴吹紬さん、そして今日平沢さんってひとが来るぞ」

空「先輩は？いないのか？」

律「おう、だから私が部長だ！」

碧「かわいそうな秋山さん」

律「何か言いましたか鷹成く〜ん」

田井中さんが青筋を浮かべていた、怖い怖い。

零「どうする？見学してみる？」

空「賛成！」

零「まあ、空也はそういうだろうね。…碧は？」

碧「……行ってみるか。いいのか田井中さん」

律「おう、ぜひ来てくれ」

零「じゃあよろしく、田井中さん」

その時、昼休みの終わりを告げるチャイムがなった

律「じゃあ放課後に」

碧「ああ」

さて寝るか

律「あ、そうだ3人とも、これから律って呼んでくれていいぞ」

零「うん、じゃあ僕たちのことも名前で呼んでよ。いいよねえ？」

零次が俺達に確認をとる

空「かまわんぞー」

碧「ああ、じゃ改めてよろしくな、律」

律「よろしく、碧、空也、零次」

そして睡眠時間、もとい授業が始まった

科目は俺の嫌いな英語だった

5分と待たず睡眠の天使が俺を迎えに来たのだった

んでもって放課後

俺、空也、零次、律、秋山さんは軽音部の部室に向かっていた

秋山さんは律に隠れるようにして歩いている

おい、空也

そんな腹を空かせた狼のような目で秋山さんを見るんじゃないやありません
怯えきってるぞ

律「ついたぞ」

律が音をたてて扉を開けると、そこにはこれまた秋山さんに負けず劣らずな美少女がいた

紬「あら、今日は大人数ですね。お茶たりるかな」

律「おっす！ムギ。ミルクティー頼むぜ」

紬「わかった。漣ちゃんは？」漣「私もミルクティーで」

紬「うん。…えっとそちらの方々は？」

律「ああ、まあとりあえず座れ」

俺達は机と椅子を各々出し、座った

紬「何か飲みますか？」

いつから軽音部って喫茶店になったんだ？

俺の軽音部のイメージが違うのか？

いやいやそんなはずないだろ

零「じゃあ紅茶もらえるかな？ミルクはいらないよ」

お前は馴染みすぎだ

紬「わかりました。そちらは？」

空「右に同じく」

碧「以下同文」

紅茶なんて午後ティーくらいしか飲んだことないぜ

おそらく琴吹さんであろうウェイトレスさんが全員にお茶を配り終え、席についた

律「じゃあ、平沢さんは来てないけど自己紹介しとくか。私は「部長」の田井中律だ。ドラムをやってる」

部長をやたら強調したな

漑「えっと、ベースの秋山漑です」

こら空也、その目をやめなさい。
怯えてるでしょ

紬「琴吹紬です。キーボードです。よろしく」

おい、空也。なに鼻の下を伸ばしてるんだ。秋山さん一筋じゃなかったのか

零「春咲零次です。よろしく」

空「笹中空也だ。よろしくう!!」

テンション高えな、お前は

碧「鷹成碧です。よろしく」

俺達が自己紹介を終えると秋山さんはなにやら考えているようだった

律「そういえば3人とも楽器はやったことあるのか？」

俺達3人はアイコンタクトをとり代表して零次が答えようとした時、
部室のドアが開いた

唯「あの〜」

律「お！平沢さん！」

唯「え？あ、はい」

律「まあ座って座って」

紬「紅茶でも飲む？」

唯「は、はい」

律「平沢さんはどんな音楽がやりたいの？」

唯「えっと、あの、その、実はやっぱり入るの止めさせてもらおう
と思って来ました」

「「「「「……え？」「「「「「」

唯「あの軽音部ってギターとかやるって知らなくて、もっとかる〜
いかんじの音楽やるんだと思ってて、だから、あの、その」

律「じゃあどんな楽器ならできるの？」

唯「えっと、カスト、……ハーモニカ」

律「あつ、じゃあちよつとやってみて」

そういつて律はハーモニカを平沢さんに渡す

唯「ごめんなさい、出来ません」

おい、なぜ見栄をはった？

唯「ごめんなさい、私が軽い気持ちで入るなんて言って、うぐ、ぐす」

とうとう泣いてしまった

律「えっと、じゃあ私たちの演奏聞いてみてよ」

唯「演奏してくれるの!？」

立ち直り早えなあ、おい

そして律たち3人は「翼をください」を演奏した

まあ可もなく不可もなくな演奏だった

唯「わぁ」パチパチパチ

漣「どうだった？」

唯「言葉にしにくいんですけど」

律「うんうん」

唯「あんまり上手くないですね」

ホントに言葉にしにくいことだったなあ

律たちは苦笑いだ

唯「でも、私でも出来そうな気がしてきました」

律「じゃあ」

唯「はい、私この部でがんばろうと思います」

漣「そっか、パートはギターをやってもらえるか？」

唯「はい！」

律「じゃあ自己紹介しとくか」

全員が自己紹介を終え、お茶を飲み始めた

漣「あ、あああああっ！！！！」

秋山さんがいきなり奇声を発した

律「どうした！？漣」

漣「どうしたもこうしたもあるか律！

この3人はあのSHOTのメンバーだよ！」

律「な、なに！？そうなのか？碧」

碧「バレちったか」

空「あちゃー」

零「まあしょうがないんじゃない」

そう実は俺達は地元じゃあそこそこ有名なバンドだった

唯&紬「SHOT?」

漚「知らないのか?」

唯「うん」

紬「わたしも」

律「SHOTっていえば、メンバー全員が中学生なのにどのバンドもSHOTのあとにだけは演奏したくないというほど、圧倒的な技術をもつバンドだよ!」

唯「へ、へー」

紬「そ、そんなにすごいんだ」

空「んじゃ、まあ、改めて自己紹介するわ、笹中空也、SHOTでベースをやってた」

零「春咲零次、ドラムだよ」

碧「んでもって鷹成碧、ギターとボーカル」

漚「演奏聞きたいな!」

律「私も！」

零「楽器ないから明日でいいかな？」

「はい！おねがいします！！」

碧「じゃあそろそろ帰りますか」

空「そうだな」

その日はこれで帰宅した。

まさか秋山さんがSHOTを知ってたとは…

家につき玄関の戸を開ける

碧「ただいま」

「おかえり！お兄ちゃん」

明るい声で迎えてくれたのは妹の紅葉^{もみじ}である

俺は制服のままソファーに寝転がりテレビを見始めた

紅「部活きめた？」

キッチンで料理をしながら聞いてきた

碧「うん、軽音部」

紅「へー、またバンドやんの？」

碧「うん。……なんでお前が料理してんの？」

紅「なんかお父さんとお母さんが世界一周旅行行くとか言って1年帰って来ないんだって」

碧「へー、……え？」

紅「だから、これから1年間二人だけで生活すんの」

碧「マジかよ」

相変わらず、勝手な親だった

昔も俺達がまだ小学生のときに北極探検に行くとかわけがわからな
いことをいって1年くらい帰って来なかったときがあったな

まあ、そのおかげでか紅葉は家事は一通りこなせ、俺もその手伝い
くらいはしていた

兄としては妹を無事に嫁に送り出せそうなので安心している

そのあと俺は飯を食い、風呂に入り、日課のギターの練習して眠っ
たのだった

次の日の放課後

俺達、SHOTの3人は部室でミニライブ的な事をしていた

3曲ほど演奏し、他のメンバーにおほめの言葉をいただき、まったりお茶をしながらその日の部活は終わった

つーか練習しろよ、お前ら

第二話 部活！（後書き）

せい「さて、第二話お楽しみいただけただけでしょうか」

碧「3人で合わせたのなんて久しぶりだから緊張したぜ」

せい「しかも、妹がいるとは、……けしからん！」

碧「お前がつくったんだろ！」

せい「さて、今回は唯のギターを買うためにバイトします」

碧「俺達SHOTが大活躍！」

せい「するかどうかはまだわかりません。ではまた次回のあとがきでお会いしましょう」

碧「感想やコメントいただけると嬉しいです」

第三話 楽器！

漣「平沢さん、ギターは買った？」

俺達が入部してから何日かたったある日の放課後

俺達はお茶を飲みながらまったりしていた

俺は軽音部の女子とは普通に喋れるようになっていた

何故か？ 作者がめんど、げふんげふん

昨日、律が敬語使ったらデコピンゲームをしやがったからだ
お陰で帰ったら額が真っ赤なのを紅葉に笑われた

唯「唯でいいよ」

漣「え？」

唯「唯って呼んで」

漣「え、えっと、…………ゆ、ゆい／／／／／」

唯（かわいい）

話がまったく噛み合わないな

唯「みんなも唯でいいよ」

空「ああ、…じゃなくてギターは？」

唯「え？ああそうだった、私ギターやるんだった」

律「軽音部は喫茶店じゃないぞ」

唯「ねえねえ、ギターっていくらくらいかな？」

碧「まあ、ピンからキリまであるが、5万円くらいがいいとおもうぞ」

ちなみに俺が今使ってるギターは20万弱くらいだ

唯「5万円！？お小遣い10ヶ月分だよ、……部費落ちませんか？」

律「落ちませ〜ん」

唯はすごくおちこんでいた

零「碧、使ってないギターないの？」

零次、余計な事を言うな。

やめてくれ唯、そんなキラキラした目でみるな

碧「ごめん、あるにはあるが、どれも大切なものだから」

唯「そっかあ」

そんなにおちこまないでくれよ

紬「唯ちゃん、マドレーヌあるよ、食べる？」

唯「食べる！」

「」「現金だな！」「」

俺、空也、律、秋山さんのツッコミを無視し唯はマドレーヌを食べ始めた

澪「じゃあ、明日楽器店にいこう、いいか唯？」

唯「うん」

澪「みんなもいいか？」

みんな予定が無いようだ

その日はまったりお茶を飲みながら、どうでもいいことをはなし、解散になった。

んでもって次の日

唯が多少遅れて来たが予定通り商店街でウィンドウショッピングをしている

…え？楽器店に行くんじゃないのかって？

どうせこうなることは予想してたさ

律「いやー、遊んだ遊んだ」

唯「でも、何かを忘れてる気が…」

おいおい、マジで忘れてたのか？

漣「ギターだろ」

唯「あ！そうだった」

つーわけで楽器店にきた俺達は唯に合いそうなギターを探すことにした

といっても、真面目に探しているのは漣と俺ぐらいだ

唯「こんだけたくさんあると、どうすればいいかわからないよ」

碧「ギターを選ぶポイントはネックの太さ、重さ、音色とか色々あるが、まあ見た目が気に入ったやつとかでいいんじゃないか？」

唯「うーん、碧くんはどんなのを初めて買ったの？」

碧「俺はSquierのストラトだな5万弱のやつ、そこにあるやつみたいなのだ、ちっさかったからネックが細くて軽いやつにしたんだ」

唯「へー」

唯は俺ね言葉に適当に返事をしてふらふらしていた

聞く気ないなら最初から聞くなよ

すると唯はいきなりしゃがんで1本のギターを眺め始めた
レスポールだな

碧「気にいったのか？」

俺がそう聞くと唯は黙って頷いた

ネックは太いし重そうだな
初心者、ましてや女子むきではないが……

唯はそのギターをくいいるように見ている

こうなっちゃうとやめとけとは言えないな

滯「あったのか？」

碧「あったみたいだが……」

そういつて値札を指差す

滯「25万！？唯、たしか予算は」

唯「5万円だよ」

露骨にがつかりしていた

律「あったのかぁ、って高いな」

空「まあ、素人が始めて買うギターじゃないな」

零「あっちに安めのがあったよ」

しかし唯は動かない

律「こうなったら値切るか」

漣「いや20万は無理だろ」

紬「値切る？」

律「ああ、値切るってのはな店員さんと交渉して値段を安くしてもらうんだ」

紬「へえ、なんか懂れます」

いやいや、懂れることじゃあないですよ

律「……皆でバイトでもするか？」

碧「まあそれもありだな」

唯「そんな、悪いよ」

碧「気にすんなって、明明後日からゴールデンウィークだし、どうせ皆ヒマだし」

「「「いつもヒマしてるみたいになー!!」」」

碧「忙しいのか？」

紬「私は大丈夫です」

零「僕も問題ないよ」

律「……ヒマだよ」

澪「……私もだ」

碧「だろ？空也は？」

空「……お、俺はデ、デートが」

碧「2次元の彼女とか」

空「うるせえよ！そうだよヒマだよ」

碧「じゃあ、いいじゃねえか」

唯「でも……」

空「いや別にバイトがしたくない訳じゃねえんだ、だから気にしないでくれ」

唯「……うん、ありがとう」

その日は帰宅し、明日の放課後どんなバイトをするか決めることにした

次の日、俺達は求人雑誌とにらめっこしていた

滯のあの性格のために選べるバイトが少なかった

空「なあ、俺達はストリートライブでもしておひねり集めるやつでよくね？昔やってたやつ」

零「ああ、でもあれ大変なんだよね、シヨバ代とやらを欲しがるヤのつくお兄さんたちから重い機材もってにげたり」

碧「警察から逃げた時もあったな」

空「あったあった、あん時は楽しかったな」

滯「壮絶だな」

紬「バイトって楽しそうですね」

律「いや、それバイトとは言わないから」

そのあと結局、律たちは交通量調査を、俺達は知り合いのライブハウスで雑用をすることになった

次の日

俺達は軽音部の部室でお茶を飲んでいた
俺達男子3人ら今日の夕方から3日間、律たちは明日から2日間バイトをすることになっている

唯「みんな、ありがとね」

律「気にすんなって、みんな好きでやってることだ」

碧「ちょうどいい暇潰しだよ」

唯「うん、ありがとお」

その日の夕方

知り合いのライブハウス

「3人ともありがとねえ」

そういったのはここを経営している寅吉さんだ

自他ともに認めるオカマだ

だが、誰とでも分け隔てなく接するその人柄のよさはこの辺のバンドじゃあ有名だ

碧「いえいえ、急なお願いを引き受けていただきありがとうございます」

寅「いいのよお、私とあなたたちの仲じゃない」

零「ははは、相変わらずですねえ」

寅「どーも、あらくうちゃんは？」

くうちゃんというのは空也のことだ

空也は寅吉さんがニガテだ

今も俺の陰に隠れている

碧「ほら、挨拶しろ空也」

空「う、うるせえ」

寅「もお、照れなくてもいいのよ、くうちゃん」

そのあとどうでもいい雑談をしてそのあと掃除を始めた

寅吉はいい人なんだが話していると胸焼けしそうになる

寅「そうそうあなたたちの、最後の日に演奏してくれない？」

碧「え、でも」

寅「おねがいよ、あなた達が演奏することになればお客さんあつま
るし」

零「でも、いきなりじゃあ」

寅「ボーナスでるわよ」

零「引き受けましょう」

ちゃっかりしたやつだな

そんなわけで俺達は明後日の夜、ステージに立つことになった

その事を律にメールすると皆で見に来てくれるらしい

まあ、唯にもお金渡せるしちょうどいいや

そして2日後の夜

律「おーい、見に来たよ」

碧「ありがとな」

唯「こちらこそ、ありがとね」

空「気にすんなって」

寅「あなたたち、そろそろ出番よ」

零「はい！」

()()(なぜおんな言葉?)()()

驚いてるなこいつら

碧「じゃあそろそろいくな、終わったらまた来るから」

寅「……………あなたたち、あの3人の」

漣「軽音部の仲間です」

寅「そう、あの子たちの演奏聞いたことは？」

紬「はい、部室で1度だけ」

寅「そう、じゃあ驚くかもね」

寅吉が不敵にわらった

その時、3人が出てきた

その瞬間、周りのお客さんは皆大歓声をあげた

碧「ご無沙汰してます、SHOTです」

またお客さんの歓声が大きくなる

唯「あれ？碧くんのギター、いつものと違うね」

寅「ふふふ、やっぱりあの子たち話してなかったのね」

律「なにをですか？」

寅「私の口から言うことじゃないわ、でもそうね、あの子たちの、特に碧ちゃんにとっては大切な友達のものなのよ」

律「へえー」

その時、零次のドラムスティックをたたく音がかすかに聞こえた

演奏が始まる

その演奏に律たちは圧倒されていた

滯「前と全然ちがう」

唯「前のときも凄かったのに」

紬「なんか零次君、人が変わったみたいないな感じ、いつもの独特なペ
ースをさらに磨きあげたみたいないな」

滯「空也も前に増して、力強いベースだよ、そして……」

律「碧だよな、ボーカルもすごいがギターが特に」

寅「ふふふ、あの子たちの本気モードよ、ここじゃなきゃ見れない
んだから」

唯「なんでここだけなの？」

寅「あの子たちにとってここは大事な場所なのよ」

寅吉はそういつて微笑んだ、だがその微笑みには悲しみが混じって
るように律には見えたのだった

そして演奏が終わり、会場の興奮は最高となった

寅「あーあ、かわいそうね、後の子達」

そういつて寅吉は楽屋に向かった

それと入れ違いに碧達が出てきた

碧達はファンに囲まれ色々声を掛けられている

そのファンたちをぐり抜け律達と合流した

漑「すごかったよ！」

律「ああ、興奮した」

碧「ありがと、ここじゃあ人もすごいし出ようぜ」

空「腹減ったし、前のファミレスで飯食おうぜ」

零「お給料はもらってきたよ」

そうして俺達はライブハウスを出てすぐ前のファミレスに入った

席につき全員が注文を終えた

漑「すごかったよ！」

さつきも聞いたぞ

紬「とっても感動した」

零「ありがとう」

碧「そういや、お前らの近くに寅吉さんいたな」

唯「寅吉さん？あのオカマの人？」

空「そうだ、なんかいつてたか？」

律「うーん、碧の使ってるギターは大切な友達のやつで、あのライブハウスはとても大事な場所だってこと」

碧「そっか」

余計なことを……

零「それよりお給料どうだった？」

漣「私たちは合わせて5万円」

零「僕たちは……、お、10万円も入ってる」

空「寅吉さん太っ腹だぜ」

これで20万か

律「足りないな」

碧「まあ、値切ればそのくらいになるんじゃないね」

律「そうだな、明日いつてみるか」

次の日、俺達は楽器店にいつて唯のギターを買った

20万でギリギリ買えた

第三話 楽器！（後書き）

更新遅れてすいませんでした

コメントいただけると嬉しいです

第四話 勉強！（前書き）

せい「さて、第四話です」

碧「前回の謎のある話とはちがい、今回は基本グダグダしてます」

せい「前回、後書きに書けなかった事を少々」

碧「実は俺が初めて買ったギターは作者の初めて買ったギターです」

せい「またそのうち、オリジナルキャラクターのプロフィールとか載せられるといいなと思っています」

碧「では、第四話スタート！」

第四話 勉強!

律「勉強したかあ?」

今日は中間試験

碧「まあ、ぼちぼちだな」

律「碧は成績いいのか?」

碧「理系科目は得意なんだがな、英語は苦手だ」

律「ほお、じゃあ勝負するか? 買ったらジュースな」

碧「上等だ」

空「俺も混ぜろよ」

律「おう、じゃあ負けた1人が他の二人にジュース奢るってことで」

碧「了解」

そんなわけで試験が始まった

科目は現文、古文、英語、日本史、物理だ

そして答案返却日

律「……なんで2人共そんなに勉強できるんだよ!!」

漣「碧は数学100点、空也は英語が100点って……」

碧「まあ数学好きだしな」

空「実は帰国子女だし」

空也は中学に上がるまでイギリスにいたのだ

律「意外だな、つーか碧! 英語苦手とか言いつて80点とかとるな
!」

碧「苦手な事を理解してるから真面目に勉強したんだよ」

空「零次に教えてもらえば楽だし」

漣「零次そんなに頭いいのか?」

碧「零次、テストどうだった?」

零「いつも通りかな、二人ともすごいねえ、100点はとれないよ」

だがそこにある零次の解答用紙すべてに90台の数字が並んでいた

律「……はあ、なんかやる気なくなっちゃったな、部室行こうぜ」

俺達は部室へ向かった

部室には紬がいた

律「ムギ、テストどうだった？」

紬「まあまあでしたよ」

まあまあ、とかいってけっこう取ったんだろ

その時唯が部室に入ってきた

唯「……助けて」

律「どうした！？唯！？」

唯「数学がクラスで唯一の追試だった」
やっちゃったな唯

澪「勉強しなかったのか？」

唯「うん、ギターの練習しちゃった」

空「ああ、わかる、部屋の掃除とかはかどるよな」

碧「追試いつだ？」

唯「明明後日だって」

零「明後日休みだし大丈夫かな」

唯「うん、今度はちゃんとやるよ」

律「頼むぜ」

そんなわけで今日は大して練習もせず部活は終わった

まあ、いつも練習してないけどな

律「それはいうな!」

次の日の放課後

唯「勉強教えてください!」

漣「勉強できなかったのか…」

律「ダメダメだな!」

紬「まあまあ、明日みんなで勉強する?」

漣「そうするか」

律「碧、来てくれるか?」

碧「いいのか?」

漣「数学得意だろ?」

空「あゝ、ダメダメ碧は教えんのへったくそだから、その辺は零次のが得意だよ」

うるせえぞ

零「天才肌なんだよ碧は、ギターは教えるの上手いのね」

碧「どこでやるんだ？」

律「唯の家、大丈夫か？」

唯「大丈夫だよ、お父さんもお母さんもないし、妹がいるだけだよ」

漣「迷惑じゃないか？」

唯「大丈夫だよ」

律「じゃあ、10時くらいからでいいか？」

唯「うん！」

碧「今日もちゃんと勉強しろよ」

唯「う、うん」

大丈夫か？

つーこって次の日

俺3人は唯の家の玄関にいる

空也がインターホンをおし、俺達は走りだした

走りだした？

碧「なんでピンポンダッシュしてんだよ!？」

零「お約束だよね」

碧「迷惑だろ、戻るぞ」

俺達が戻った時、ちょうど玄関の扉が開いた

憂「こんにちは、……どうしてそんなに息が上がってるんですか？」

碧「はあはあ、お気になさらず」

憂「……あ、皆さん上がってください」

そういつて俺達を家に上げたあと、スリッパを人数分だし、奥の部屋にいったのだった

碧「出来た妹だな」

空「まあ、姉が姉だし」

零「でも紅葉ちゃんもいい子だよね」

空「ムカつくけどな」

碧「てめえが下心透け透けの目で見てたからだろ」

空也の鳩尾をぶん殴ってやった

唯「あ、上がって上がつて」

碧「お、上か、じゃあおじゃまします」

俺達は階段を上がり唯の部屋に入った
軽音部メンバーは全員いた

ちゃんと勉強してるようだ

……律意外は

空「どうするモンハンでもやるか？」

碧「2ndGなら」

律「お、私も持ってるぞ」

碧「よっしゃラージャン行こうぜ」

空「律できんのか？」

律「まあ、一応ハンターランク9だから行けると思う」

碧「零次は？」

零「僕は勉強みてあげなきゃだから」

空「3人か、まあいいや律なにつかうんだ？」

律「大剣だぜ、二人は？」

空「俺はガンス」

碧「俺は片手剣だ」

ワイワイワイワイワイワイワイワイ

滯「うるさい！」

殴られた、痛い

律「他の部屋でやるか、いいか唯」

唯「いいよ、下のリビング使って」

滯「お前ら何しに来たんだよ！！」

紬「まあまあ滯ちゃん落ち着いて」

つーことで俺達はリビングでゲームを始めた

律「憂ちゃん、なにやってるんだ？」

憂「あ、お昼を作ってます」

律「迷惑かけるねえ」

憂「いえいえ、お気になさらず、皆さんは何をしてるんですか？」

碧「モンハンだよ」

憂「へー」

興味ありげな顔だな

碧「やってみるか？」

憂「いいんですか？」

空「気にすんなよ、今零次から借りてくるから」

憂「ありがとうございます」

碧「台所、大丈夫か？」

憂「はい、もうあと盛り付けだけですから」

律「まあそのくらいなら後でいいよな、私たちも手伝うし」

憂「そこまでしてもらうのは」

碧「遠慮するなよ」

空「借りてきたぜ」

碧「じゃあやるか」

そうして俺達はモンハンを始めた

憂ちゃんは初心者にしては上手だった

そのあと昼食を食べ、唯の友達の実鍋さんの差し入れを食べ、紬の持ってきたケーキを食べ、他の時間はゲームしていた

ほんと何しに來たんだ、俺達は

次の日

唯「100点でした!」

律「極端!」

澪「これでやっと練習できるな」

紬「じゃあ始める?」

その時、唯から大量の汗が……

唯「…………コード忘れちゃった」

碧「…………全部か?」

唯「てへ」

「「「「「はあ」「」「」「」

また一から教えるのかよ

こいつらずっと練習できないんじゃないかねえのか？

第四話 勉強！（後書き）

せい「さて第四話、お楽しみいただけただけでしょうか？」

碧「モンハンは2ndGが最高だよな」

せい「3rdは手応えがあんまりなかったな、お前たちの使ってる武器はかつてなイメージだ」

碧「まあ、わからなくもないな」

せい「では、次回は合宿編です、SHOTの秘密が徐々に明らかに！？」

碧「なに！？」

せい「そして碧と律が……………」

碧「き、気になる」

せい「では次回もよろしくお願いします」

碧「感想等、待ってます」

第五話 合宿！

漣「合宿をします」

夏休みが始まり、このうだるような暑さからもようやく慣れ始めたある日

俺達は部室にいた

唯「がっしゅく！」

空「なんか部活っぽいな」

碧「いや、部活だから」

律「海にする？、それとも山にする？」

漣「遊びにいくんじゃないありません」

碧「金かかるのか？」

零「ああ、碧は今親いないもんね、すぐにお金用意出来ないか」

律「一人暮らしか？」

紬「一人暮らし！なんか憧れます！」

碧「い、いや、妹と二人だ」

妙な期待をしないでくれ紬

空「かわいいよな」紅葉ちゃん

隣でぼわわしてる気持ち悪いやつを音速で50発くらい殴った

零「さて、空也はおいといて、どうするの？」

律「いや、いいのかよ」

碧「きにするな律、いつものことだ」

律「そうか、どうするんだ滯」

滯「そうだな、ムギ、別荘とか」

紬「ありますよ」

(((((あるのか)))))

そんなわけで合宿初日

唯が遅刻するという、ハプニングが、まあわりと想定内なハプニングがあったが電車で遅れることなく予定通りの合同をしている

俺達は電車のなかにいる

つーか律、唯、お前たちははしゃぎ過ぎだ

そんなこんなでムギの別荘についた

紬「ごめんね、今年は一番小さいところしか借りられなかったの」

碧「うちよりデケエ」

空「俺んちなんかマンションだからな」

俺達が小声でそんな庶民の会話をしている、女子もそんな感じらしい
しかし

零「いい景色だね」

紬「そうなの」

零次、ちょっとは関心を持ちなさい、失礼でしょ

俺達は別荘のなかに入り男子部屋、女子部屋に別れ各々の部屋に荷物をおいたあと楽器が練習できる部屋にきた

紬「ちょっと古いものだから使えるかな？」

滞「大丈夫そうだよ、さて練習」

律「遊ぼうぜ」

唯「いえーい」

そこには水着を着た律と唯がいた

鼻の下を伸ばしている空也をぶん殴ってやろうかと思ったが何故だか俺は律から目が話せなかった

漑「練習が先だろ！」

律「遊んでからやるよ」

唯「ムギちゃんも行こ〜」

そういつて律たちは出ていつてしまった

……………気まずい

漑「りつゝ、私をおいていくなあゝ」

そういつて漑もでていつてしまった

零「とりあえず、練習する？」

空「いやでも女子の水着をこの目に納めるチャンスだぞ」

碧「だが、あいつら帰って来たら練習できないぞ」

空「えー、でもよお、見たくないか？漑の水着」

零「僕は紬さんのほうがいいかなゝ」

碧「零次まで何いつてんだよ」

空「お前は見たくないのかあ、さっき律の水着に釘付けだったじゃねえかあ」

碧「う、うるせえ」

零「入学式以来、ラブラブだもんねえ」

碧「うるせえ、そんなんじゃねえよ、それに俺は恋愛なんて興味ねえ、そんなことしたら風に殺されちまう」

「「「……………」」」

3人の間に気まずい空気が流れる

碧「わりい、こんな風にさせるつもりはなかったんだが」

空「きにすんなよ、なあ碧、完全に忘れるなどは言わねえが、……あいつのことはもう」

碧「……………」

零「練習しよっか」

碧「ああ」

空「そうだな」

そのあと俺達はただひたすらに練習した

そして律達が遊び終わり練習を始め、俺達は夕食を作っていた

碧「やっぱカレーだよな」

零「まあ、定番だよな」

空「そういやさっきの練習、途中めっちゃくちやだったな」

零「そうそう、碧なんかいきなりシャウトしたやってさ」

碧「零次だって半狂乱でドラム叩いてたじゃんか」

零「ははは、空也なんて脱いでたからね」

碧「気持ち悪いから二度とするなよ」

空「おい！」

零「なんか昔を思い出したよね」

空「始める前にあんな会話してたからじゃんか」

碧「俺、正直泣きそうだったんだよな」

空「俺達にとってあいつは親友、なんて言葉じゃ言い表せないやつだったからね」

俺達の間にもまたさっきのような空気が流れた

だがさっきのよりも温かく、それでいてなにか物寂しい感じのするものだった

律「メシあるか？」

唯「お、カレーだ！」

零「うんもうできるから待ってて」

漑「3人とも悪いな」

空「きにすんなよ」

そんなわけで俺達はメシを食い終えた、そして紬が入れてくれたお茶を飲みながら雑談をしていた

紬と唯、零次は片付けをしている

律「そういやなんで漑は合宿するなんていい始めたんだ？」

碧「確かに、気になるな」

漑「……………笑わないか？」

律「大丈夫だよ」

空「ああ」

滯「碧達の演奏を聞いて、私たちこのままでいいのかなって思ったんだ、

……いや、こんな風に皆で演奏したいって思ったんだ」

律「………そっか」

碧「なんか、照れくさいな」

そんな雑談をしたあと、各々の部屋に別れ床についた

だが眠れなかった俺は、2本持ってきたうちの練習で使っていない方のギターを持ち、テラスにでた

へさてここからは、律視点で物語を進めます

私はなかなか寝付けなかった

滯のあの言葉をずっと考えていた

確かにあんな風に演奏したい、いちドラマーとしてその思いは当たり前だと思っている

だが、そんなの無理だと内心決めつけ遊んでしまう自分もいた

律「あゝあ、なんか考え過ぎちゃったな、外で頭冷やすか」

そう呟き私はテラスにでた

だけどそこには先客がいた

碧が手すりに座り私の聞いたことのない歌を弾き語っていた

その歌詞は英語らしく意味はよくわからないがどこか寂しげな歌だった

碧「ふう、あ、律」

碧が私に気づいた

律「邪魔しちゃったな」

碧「気にするなよ、律こそどうしたんだ？こんな時間に」

律「ちょっと考え事だ、となりいいかな？」

碧「ああ」

律「……そのギター、いつものやつじゃないよな、ライブのときのか？」

碧「ん？ああ、まあお前には話しとくか

……これはな、大事な友達のものなんだ」

碧「まちわたるもともとSHOTは4人組でな、笹中、春咲、鷹成、そして岡町航おかの頭文字をとってSHOTだったんだ」

私は碧の寂しそうな顔を見つめながら黙って聴いていた

碧「航は俺とギターテクを競い合う仲だったんだ、そして俺達が初めてライブをするはずだった日、

……あいつは交通事故で死んだ」

律「えっ？」

碧「居眠り運転のトラックにひかれてな、即死だったらしい」

私は思わず顔を伏せた

でも、碧は構わず続けてくれた

碧「だけどその時、あいつは大事そうにギターを抱えていたらしい、おかげでそのギターは無傷だった」

律「じゃあ、そのギターは」

碧「ああ、そのときのギターだ」

律「そうか……」

碧「悪いな、暗い感じになっちまって」

律「いや、いいんだ

……なあ、さっきの歌ってよ」

碧「……ああ」

碧はさっきの歌を歌ってくれた

碧がうたい終わった

私は碧の肩にそっと頭を置いた

律「こうしてると、なんか思い出すな」

碧「……ああ」

それ以上、私たちは言葉を交わさなかった

私にとって碧は………

〈ここからは、碧の視点で進めます〉

俺にとって律はなんなのだろう

ふと、そんなことを考えた

ただのクラスメイト？

………違う

入学式で一緒に恥をかき、クラスメイトたちからそれをからかわれる仲？

……違うな

大切な部活の仲間？

……少し違う

それだったら、唯達と一緒にだ

俺は律に、あいつらへとはまた違う感情を抱いている

その答えを見つける前に、律が寝てしまった

俺は律を女子部屋に届け、俺も部屋に帰った

空也のいびきがうるさい

零「おかえり」

碧「なんだ、まだ起きてたのか」

零「まあね、誰か一緒だったでしょ」

碧「ああ、律がな」

零「そっか、なんかおもしろい話でもした？」

俺は迷った、律にあいつの話をしたことをはなすべきか

しかし、俺は話した

そうするのが正解だとおもった

零「そう、……律さんなんだって？」

碧「ノーコメントだった」

零「そっか、じゃあおやすみ」

碧「おう」

あの歌を歌ったことは話さなかった

それから俺達全員は海で遊び倒し、たいして練習もせず、合宿を終えたのだった

第五話 合宿！（後書き）

せい「さて第5話、お楽しみいただけただけでしょうか」

碧「更新遅かったな」

せい「すいません、学校が忙しくて」

碧「まったく、次は早く頼むぞ」

せい「はい、では次回はなんか日常系のオリジナルにしようと思っているのでよろしくお願いします」

碧「ご意見ご感想待ってます」

第六話 宿題！

空「頼む、宿題みしてくれ」

碧「頼む零次」

8月29日

俺達は部室に集まり特に練習もせずだらだらしていた

零「毎年毎年、学習しないねえ」

碧「最初はちゃんとやろうっておもうんだけどな」

空「めんどくさくなっちゃうんだよな」

零「まったく、どのくらい終わったの？」

碧「俺はあと英語だけだ」

空「俺は全部だ」

零「空也は予想通り、碧は意外とやってるね」

意外ととはなんだ

零「じゃあ、明日碧の家でやろうか、大丈夫だよな？」

碧「問題ないぞ」

そんな話をしていると律と唯が話に入ってきた

律「わ、私も碧の家、行ってみたいな」

唯「あ、わたしも」

碧「かまわねえけど」

…なんで？」

まあ、だいたい予想はつくけどな

律「いや、それはなあ」

唯「い、妹さんにあってみたいし」

律「あ、碧の部屋も見たいしな」

碧「じゃあ俺の部屋で妹と遊んでくれ、俺達はリビングで宿題してるから」

「「宿題見せてください!!」」

なんか扱い方わかってきたな

漣「私もいつでもいいか？」

紬「あ、私もいい？」

碧「かまわんぞ」

零「その方が僕も楽しね」

その日俺達は相変わらず練習を対してせずどうでもいいようなことをグダグタしゃべっていた

次の日

紅「そろそろ来る時間かな」

碧「ん、そうだな、行儀よくしろよ」

紅「わかってるよ」

その時、聞きなれたチャイムがなった

碧「お、きたか」

俺は玄関へ移動し、鍵をかけていない扉を開けた

空「おっす」

零「おじゃまします」

6人全員がてきとーに挨拶をし、入ってきた

碧「とりあえずリビングいってくれ」

紅「いらっしゃい」

律「お、妹さんか」

唯「かわいいねえ、碧くんになくて良かった」

うるせえ

紬「そお、目とか似てると思うんだけど」

唯「あ、ほんとだ」

ワイワイガヤガヤ

律たち3人は紅葉をいじり始めた

零「ねえ、そろそろ紅葉ちゃんかわいそうだよ」

零次が小声で言ってきた

碧「そうだな、宿題始めるぞ」

滯「妹さんも困ってるだろ」

「「はい」」

というわけで宿題を始めたが…

俺は昨日のうちに少しやったのでわからないところを零次に聞くだけで終わった

空也もバカではないので零次のを写せば問題ないだろう

が、しかし……

碧「お、お前らよく桜高受かったな」

律と唯はヤバイ

漑「これ、中学の範囲なんだけどな」

零「確かにこれはちよつとねえ」

昼飯を食い終わり、律と唯が進んでいないようなので見てやると理解すらできていなかったらしい

紬「まあ、基礎から要点だけ押さえて教えてあげよう」

零「そうだね、じゃあ二人一組に別れようか、じゃあ僕と紬さんペアと碧と漑さんペアで」

律「うわ、碧漑ペアハズレ」

漑「そんなに私たちとやりたいかあ律」

碧「そこまでいうならしょうがない」

律「えっ!？」

零「じゃあ決定みたいだね」

というわけで俺は漣と共に律の勉強を見ることとなった

1時間後

碧「なんだ、やればできるじゃんか」

漣「そうなんだよ、律は昔からやればできる子なんだよ」

律「いやあ、それほどでもないよ」

碧「まあ、唯の方もそろそろ終わりそうだし、なんかして遊ぶか」

律「碧の部屋がみたい!」

唯「私も!」

漣「おまえは早くやれ」

碧「じゃあ紅葉に茶でも出してもらおうよ」

紬「あ、ケーキ持ってきたよ」

日本茶なんだが

唯「け、ケーキ！」

いいから早くやれ

そんなわけで紅葉にお茶をいれさせ、唯の宿題も終わったのでみんなでお茶することにした

紬「和菓子のほうが良かったかな」

紅「いえ、こちらこそ紅茶とかなくて」

唯「まあまあ、なかなか美味しいよ」

律「そういえば紅葉ちゃんは何年生？」

紅「中三です」

漣「じゃあ受験生だな」

紬「志望校は決まった？」

紅「桜高にできれば入れればなあと」

碧「律と唯が入れたんだぞ」

零「入れるよ」

「「ひどい!!」」

紅「はは、ありがとうございます」

律「なあなあ、碧の部屋見てもいいか？」

碧「いいけど、なんもないぞ」

唯「いいからいいから」

滯と紬、零次はいいというので律と唯、そしてなぜか紅葉もついてきた

律「なんか、普通だな」

唯「あ、でもアンプがあるね」

紅「ほんと音楽関連以外は普通だよね」

うるせえ

律「ねえ、ギター見せてよ、ギター」

碧「スタンドにあんだろ」

律「あれは、いつも使ってるやつだろ」

唯「ライブのやつは？」

碧「あれはダメだ！」

つい、声色を強くしてしまった

紅「お、お兄さん」

碧「あ、すまん」

が、しかし……

碧「お、お前らよく桜高受かったな」

律と唯はヤバイ

滯「これ、中学の範囲なんだけどな」

零「確かにこれはちよつとねえ」

昼飯を食い終わり、律と唯が進んでいないようなので見てやると理解すらできていなかったらしい

紬「まあ、基礎から要点だけ押さえて教えてあげよう」

零「そうだね、じゃあ二人一組に別れようか、じゃあ僕と紬さんペアと碧と滯さんペアで」

律「うわ、碧滯ペアハズレ」

漚「そんなに私たちとやりたいかあ律」

碧「そこまでいうならしょうがない」

律「えっ!？」

零「じゃあ決定みたいだね」

というわけで俺は漚と共に律の勉強を見ることとなった

1時間後

碧「なんだ、やればできるじゃんか」

漚「そうなんだよ、律は昔からやればできる子なんだよ」

律「いやあ、それほどでもないよ」

碧「まあ、唯の方もそろそろ終わりそうだし、なんかして遊ぶか」

律「碧の部屋がみたい!」

唯「私も!」

漚「おまえは早くやれ」

碧「じゃあ紅葉に茶でも出してもらおうよ」

紬「あ、ケーキ持ってきたよ」

日本茶なんだが

唯「け、ケーキ！」

いいから早くやれ

そんなわけで紅葉にお茶をいれさせ、唯の宿題も終わったのでみんなでお茶することにした

紬「和菓子のほうが良かったかな」

紅「いえ、こちらこそ紅茶とかなくて」

唯「まあまあ、なかなか美味しいよ」

律「そういえば紅葉ちゃんは何年生？」

紅「中三です」

滯「じゃあ受験生だな」

紬「志望校は決まった？」

紅「桜高にできれば入れればなあと」

碧「律と唯が入れたんだぞ」

零「入れるよ」

「「ひどい!!」」

紅「はは、ありがとうございます」

律「なあなあ、碧の部屋見てもいいか？」

碧「いいけど、なんもないぞ」

唯「いいからいいから」

滯と紬、零次はいいというので律と唯、そしてなぜか紅葉もついてきた

律「なんか、普通だな」

唯「あ、でもアンプがあるね」

紅「ほんと音楽関連以外は普通だよ」

うるせえ

律「ねえ、ギター見せてよ、ギター」

碧「スタンドにあんだろ」

律「あれは、いつも使ってるやつだろ」

唯「ライブのやつは？」

碧「あれはダメだ！」

つい、声色を強くしてしまった

紅「お、お兄ちゃん」

碧「あ、すまん」

律「わかってるよ、他にないのか？」

碧「ああ、そこに2つあるぞ」

唯「見せて見せて」

律「へえストラトか」

唯「あ、最初に買ったてやつ？」

碧「ああ」

律「もう一個のは」

唯「なんか変な形だね」

碧「ああ、セミアコってんだ、それは…」
紅「お兄さん、私もう下行くね」

碧「あ、……ごめん」

紅「謝らないでよ、お兄さんわ悪くないし」

律「どうしたんだ？」

碧「なんでもない、俺たちもリビングいこうぜ」

唯「えー、もっとみたいよお」

碧「また今度な」

そういつてリビングで少し話をしたあと、みんなは帰っていった

紅「はあ、なんか騒がしい人たちだね」

碧「確かに、……さっきは悪いな」

紅「あやまんなよ」

碧「わかった」

空「いい兄妹だな」

「「……まだいたの？」」

空「ひでえ!!」

途中から全く存在感のない空也でした

第六話 宿題！（後書き）

碧「ずいぶん間あいたな」

せい「いやあ、すいません」

碧「まったく、放置されてた身にもなれよ」

せい「ごめんな」

碧「……まあ、いいよ、次はどうなるんだ」

せい「文化祭編だな、まあ今年中にアップしたいと思う」

碧「まあ、がんばれよ」

せい「では、少し間があいてしまいましたが、それでも読んでいただいている読者の皆様、まことにありがとうございます」

碧「感想、誤字脱字、応援のメッセージなど書いていただけると嬉しいです」

せい「それではまた次回の後書きで」

第七話 顧問！

碧「文化祭かあ」

夏休みも終わり、つまらない授業が始まって俺の憂鬱メーターはすでに限界値を迎えたにも関わらず、またまためんどくさい行事がやって来てしまった

零「碧は文化祭とかお祭りとか嫌いだよね」

律「へえ、なんでだ？」

唯「楽しいじゃん」

現在部室でお茶している

空也と滯は掃除

紬は文化祭の講堂使用届を提出しに行ってる

碧「人の多いところ嫌いなんだよ、特に同年代の女子がたくさんいたりするとさらに無理だ」

律「なるほど」

唯「シャイですなあ」

碧「うるせえ」

零「まあ、わからなくてもいいよ」

その時いきなり扉が音をたてて開いた

そこには祭やら女やらが大好きな男とそれを白々しい目で見ている
漣がいた

空「何をいうか！文化祭は女子とお近づきになる絶好の機会だぞ！
特に準備の時間がたまらない！」

うるさい、黙れ

つーか漣、空也をスルーするな
お前なら止められるはずだ

空「そしてなんといっても他校の女子ともふれあえる！」

うざい

俺が文化祭が嫌いな理由はむしろこいつにあるんじゃないか？と真
剣に考察していた

零「でも、毎年玉砕してるよね」

律「そうなのか？」

零「うん、去年なんて傑作だったよ」

空「バカ、余計なこというな」

紬「へーそんなことがあったんだ、二人ともモテモテだったんだねえ」

漣「確かに二人ともすごいな」

零「でも、そのあと空也も告白されたんだよ」

律「なんだあいつもやるじゃん」

唯「どんな子だったの？」

碧「ラグビー部主将山村徹夫」

律「男かよ!!」

漣「さすがに可愛いそうだな」

紬「男の子同士…」

つ、紬さん？

何をぼわぼわ考えておるのですか？

漣「あ、そういえば紬は文化祭の講堂使用届け出しに行ったんだよな」

紬「うん、でも軽音部はちゃんとした部活に登録されていないからダメなんだって」

へー

…………え？

碧「どういことだ！？」

紬「うん、なんか申請書が出てないらしくて」

律「あ、そういえば」

そういうと律は机の中をさがごそのさぐり始めた

律「これか？」

なんかグシャグシャなプリントが出てきた

律「いや、お茶飲んでから書こうと思ってたんだけどなあ」

俺は一発ゲンコをお見舞いしてやろうかと思ったがその役は律の後ろで殺気を出している少女に任せることにする

10分後

濡に殴られたあとさんざん怒られた律は一応反省したらしく申請書を書いた

それを俺、律、唯、濡で生徒会に持っていく事にした

律「すいませ〜ん」

「はい」

そこにはメガネをかけた少女がいた

リボンの色からタメだとわかる

唯「あれ和ちゃん？なんでここにいるの？」

和「なんでって生徒会に入っているからよ」

唯「へえ〜そうだったんだあ」

碧「知り合いだったのか唯？」

唯「うん、幼なじみの和ちゃんだよ」

幼なじみなのに知らなかったのかよ

和「えっと、何か用？」

澪「律、申請書」

律「あ、うん、これよろしくお願いします」

和「ああ、それね、見せて」

そうやって和は申請書を見始めた

和「あ、顧問の先生は？」

律「へ？」

和「顧問の先生がいないとダメよ、ここにサインをもらってね」

そういつて和は申請書の一番下を指さした

そんなわけで俺たちは生徒会室を退散し部室に戻ってきた

さすがに空也は復活していた

空「顧問かあ、どうすんだ？」

紬「音楽の先生がいいのかな？」

滯「まあ、その方がいいけど、無理ならしょうがないかな」

律「誰かやってくれそうな人いるか」

碧「しらん、っーか教師なんてまだほとんど知らないやつばっかだ」

零「まあ、確かにね」

律「どうするかなあ」

………

軽音部にしては珍しく静寂な時が流れている

さすがに皆、真剣になっているらしい

その静寂を破ったのは意外にも零次だった

零「あれ、そういえばさわ子さんでここで音楽の教師やってたよね」

碧「そうなのか」

空「そりゃ

……使えるな」

俺たち3人に怪しい笑みが浮かんだ

滯「誰なんださわ子さんて」

碧「まあ、ちょっと待っててくれ」

そういつて俺たちは部室をあとにし教員室に向かった

10分後

さわ子「軽音部の顧問をすることになりました、山中さわ子です」

部室でぎこちない笑みを浮かべ自己紹介をしているさわ子

もとい零次の姉のバンド「デス・デビル」のボーカル兼ギターのキヤサリンだった

律「よく引き受けてくれたな」

律が耳元でささやいてきた

碧「ああ、美味しいお茶とお菓子が飲み放題食べ放題って言ったら快く引き受けてくれたさ」

律「にしてはなんかきこちないぞ」

碧「なんでだろうなあ」

そういつて適当にはぐらかしておくつもりだった

が、しかし

唯「先生って軽音部のOGですよね」

妙なところで勘のいいやつがいた

さわ子「な、なんのことかしら」

そんなことをいいながら口笛をふきはじめた

あやしいぞさわ子

漚「そうなのか？唯」

唯「うん、前りっちゃんが見てたアルバムに写真があったよ」

律「あ、そういわれればそうな気がする」

その時、律の両肩をさわ子がおもいつきり掴んだ

さわ子「どこにあるのそのアルバム」

顔が怖いぞさわ子

空「諦めろよさわ子」

碧「そうだよさわ子」

さわ子「さわ子はやめなさい！」

零「確かにさわ子さんは軽音部のOGだよ」

あーあ、ばらしちまいやがった

さわ子「零次くん！」

もう泣きそうだな

そんなわけで俺たちはさわ子との関わりやさわ子の学生時代恥ずかしい話を暴露してやった

さわ子「その事は秘密にするって約束で引き受けたのよ」

碧「まあもう申請書にサインしちゃったしな」

空「申請書出して来ちゃったしな」

さわ子「もう、まったく」

紬「まあまあ、お茶います？ケーキでもどうですか？」

お願いするわ、といったあとさわ子はまたぶつくさと文句をいい始めた

まあその文句も紬の紅茶とケーキで止まっちゃまったがな

そんなわけで俺達軽音部は顧問をゲットし今さらだがに正式な部活となった

先が思いやられるぜ

第七話 顧問！（後書き）

せい「第七話お楽しみいただけたでしょうか、皆さまお久しぶりで
す」

碧「ホントにな！」

せい「ほんとすまん、ゆるしてください」

碧「まあいい」

せい「じゃあ次回の話にいくぞ」

碧「次回はついに…」

せい「文化祭編です！」

碧「あんま好きじゃねえんだよな」

せい「まあそう言わないでやってくれ」

碧「しゃーねーなあ」

せい「ご意見ご感想まっています」

碧「誤字脱字の訂正もよろしく願います」

せい「それではまた第八話の後書きでお会いしましょう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1371w/>

けいおん！ifスト！！律ルート！！

2011年12月24日02時50分発行